

# 「上毛かるた」の札の分析

## — 社会科郷土学習の基礎資料として —

原 口 美 貴 子  
群馬大学大学院教育学研究科

山 口 幸 男  
群馬大学教育学部社会科教育講座

(1995年9月8日提出)

### A Study on the Kyodo Karuta , one of the Japanese Syllabary Cards, from a Viewpoint of Social Studies Education —A Case of the “Jomo Karuta” in Gunma Prefecture, Japan—

Mikiko HARAGUCHI and Yukio YAMAGUCHI

*Department of Social Studies ,Faculty of Education, Gunma University  
Maebashi, Gunma 371, Japan  
(Accepted September 8, 1995)*

#### 1 はじめに

かるたのジャンルに「郷土かるた」と呼ばれるものがある。「郷土かるた」とは、郷土を代表するような様々な事象を読み込んだ「いろはかるた」で、戦前から今日にかけて、都道府県レベル、市町村レベル、学区域レベルなど様々なレベルの「郷土かるた」が製作されてきた。都道府県レベルの「郷土かるた」は、現在、20以上の都道府県に存在しているが、なかでも1947年（昭和22年）に“郷土復興”、“民主主義社会の建設”、“子どもたちのための遊び”等を根本精神として製作された群馬県の「上毛かるた」は、製作以来今日までの約半世紀の間、多くの県民によって全県的な規模で親しまれ、毎年開催される県大会をはじめとし、一般家庭、地域社会、学校教育等の様々な場で幅広く活用されてきた。歴史的伝統、普及度、活用状況等のどの面から見ても、「上毛かるた」に匹敵する「郷土かるた」は存在せず、文字通り日本一の「郷土かるた」と言ってよい。<sup>2)</sup>

郷土認識の育成は、社会科教育にとって大変重要なテーマの一つである。筆者はすでに、群馬県児童・生徒を対象とした実態調査によって、「上毛かるた」遊びが児童・生徒の郷土認識（知識・情意両面）の形成に大きな影響を与えていることを明らかにするとともに、「郷土かるた」は単なる遊びではなく、郷土認識の育成という観点からみて社会科教育にとって注目すべき存在である

ことを指摘してきた<sup>3)</sup>。しかしながら、「郷土かるた」に読まれた内容、すなわち札そのものの分析はまだ行っていない。

そこで、本稿では、「上毛かるた」の読み札や絵札等の分析・考察を試みて、この面からの社会科郷土学習（地域学習）<sup>4)</sup>における「上毛かるた」の活用の可能性を考えたい。具体的には、「上毛かるた」の札の中に、製作当時の精神がどのように織り込まれているか、また、1968年（昭和43年）に改訂された絵札や、時世の変化に応じて書き改められてきた解説文がどのような改訂・変化をみせているのか等を明らかにする。これらの分析・考察は、社会科郷土学習の教材・内容に関する基礎資料になると考える。

## 2 「上毛かるた」の概要

「上毛かるた」の札を分析する前に、製作の経緯や、主な活用例を紹介しておこう。

### （1）製作の経緯

「上毛かるた」ができたのは、“戦後復興期、の1947（昭和22）年のことであり、その誕生の経緯は群馬文化協会が発行している『上毛かるた40年の歩み』によると以下のようになっている。

……当時の日本は第二次世界大戦の敗戦という惨禍の中で、食べるものも着るものも十分でなく暗くすさんだ世情にあった。その中で群馬県においては、せめて子どもたちに明るく楽しく希望のもてるなにかを与えられないだろうかという意識が高まり、当時数多くの戦争犠牲者を援護する目的で組織されていた「恩賜財団群馬県同胞援護会」が中心となってこの問題に取り組んでいくことになった。そして、“郷土を荒廃から救う、“足もとから見直す、という主旨で、昭和22年1月11日付の上毛新聞紙上に「上毛かるた」製作の構想を発表し、「かるた」の中に何を読み込めばよいか、その編集資料を広く県民から募った。資料は最終的には272件集まり、この資料をもとにして教育関係者・郷土史研究者・文化人・報道関係者等の中から18人の編集委員を選び「かるた」の編纂を始めていった。まず、44枚の「かるた」になるよう内容の厳選が行われたが、民主主義の時代にふさわしく真に群馬県を代表するような史跡・名勝・人物・産業文化等を数多くの資料から選び出すことは大変難しい作業であった。また、選んだ資料を新しい仮名遣いや制限漢字・読みやすい七五調等に注意して読札を作っていくこともなかなか簡単にはいかず、大変な努力を要した。こうしてできた「かるた」の読札に対して取札の絵は小見辰男氏が、そしてこの「上毛かるた」の最も特徴的と言われる読札の裏にある解説文は歴史研究家の丸山清康氏がそれぞれ執筆し、昭和22年11月、構想から約10ヶ月というはやさで「上毛かるた」は完成し、第一回の発行となった。……

このようにして誕生した「上毛かるた」は、その翌年から「上毛かるた競技県大会」が開かれたり、「かるた」に読み込まれた44ヶ所の現地に読み札の文句を書き込んだ木札を立てる運動が行われたり、さらには1952年に群馬県児童福祉協議会が児童福祉法に基づく「優良文化財」に指定

したりと、着実な発展を見せていった。また、1947（昭和22）年の発行当初から1993（平成5）年までの「上毛かるた」総発行部数は実に、106万8000部にのぼっていることから、「上毛かるた」が群馬県民の間に受け入れられ、親しまれている様子を窺うことができよう。現在は一部 500円で販売されており、販売利益はかるたの印刷と毎年2月に開催される上毛かるた大会の費用に当てられている。県内の各書店に並べられ、県民にとって手近で購入しやすいということも、販売部数の増加を招くとともに、親近感を起こさせる理由だと考えられる。

このように、「上毛かるた」が、群馬県を代表する教育的・文化的活動として、発展・定着してきた主な条件として、筆者は次の三点を考えている。第一点は戦後、日本の新しい方向である民主主義の時代にふさわしい内容としたことであり、第二点は県民の叡智を集め、県全体の事業として行われたこと、そして第三点は県下の子ども会や小・中学校がこの事業に積極的に関わっていったことである。

## （2）「上毛かるた」の活用例

### ①上毛かるた競技県大会

1947（昭和22）年に発行された「上毛かるた」（第1表）であるが、早くも翌1948（昭和23）年には第一回「上毛かるた競技県大会」が開かれ、その後今日まで48回もの大会が続けられている。

第1表 「上毛かるた」の読み札

い 伊香保温泉 日本の名湯	う 碓氷峠の 関所跡
ろ 老農 船津伝次平	の 登る榛名の キャンプ村
は 花山公園 つつじの名所	お 太田金山 子育呑龍
に 日本で最初の 富岡製糸	く 草津よいとこ 薬の温泉
ほ 誇る文豪 田山花袋	や 耶馬溪しのぐ 吾妻峡
へ 平和の使徒 新島 襄	ま 繭と生糸は 日本一
と 利根は 坂東一の川	け 県都前橋 生糸の市
ち 力あわせる 百六十万	ふ 分福茶釜の 茂林寺
り 理想の電化に 電源群馬	こ 心の燈台 内村鑑三
ぬ 沼田城下の 塩原太助	え 縁起だるまの 少林山
る ループで名高い 清水トンネル	て 天下の義人 茂左衛門
わ 和算の大家 関 孝和	あ 浅間のいたずら 鬼の押し出し
か 関東と信越つなぐ 高崎市	さ 三波石と共に 名高い冬桜
よ 世のちり洗う 四万温泉	き 桐生は日本の 機どころ
た 滝は吹割 片品溪谷	ゆ ゆかりは古し 貫前神社
れ 歴史に名高い 新田義貞	め 銘仙織出す 伊勢崎市
そ そろいの支度で 八木節音頭	み 水上 谷川 スキーと登山
つ つる舞う形の 群馬県	し のぶ毛の国 二子塚
ね ねぎとこんにやく 下仁田名産	ひ 白衣観音 慈悲の御手
な 中山道しのお 安中杉並木	も 紅葉に映える 妙義山
ら 雷と空風 義理人情	せ 仙境尾瀬沼 花の原
む 昔を語る 多胡の古碑	す 裾野は長し 赤城山

第一回目の会場は前橋市南曲輪町の商工クラブであり、その後何回か場所を変え、現在は前橋市岩神町の県立武道館になっている。大会の出場者は県内の小・中学校や各地区子供会の児童・生徒で、小学生の部と中学生の部に分かれ、さらに各部内で団体戦（三名一組）と個人戦に分かれている。

「上毛かるた競技県大会」は毎年2月に開催されている。その前年の12月頃から各地区子供会および各小・中学校レベルでの予選ともいえる大会を行い、その勝者が各市町村レベル、郡レベルの大会に進み、さらにそこでの勝者が各郡市の代表選手として県大会に出場するという仕組みになっている。代表選手の中には数年続けて県大会に出場し、好成績を修めるものもいる。1948(昭和23)年から1994(平成6)年までの「上毛かるた競技県大会」の参加団体数と選手数の推移をみると、第一回後しばらくは各小・中学校からの出場ばかりであったが、1966(昭和41)年の第19回以降、各地区子供会からの出場が目立ちはじめ、1971(昭和46)年には子供会数が小・中学校数を追い越し、現在では県大会は各地区子供会が中心となっている。また、県大会に参加する選手数は1965(昭和40)年前後は一時減少したものの、その後は増え続けていることから、県大会への意識は相当高いものとなっている。

以上のことから明らかなのは、今日「上毛かるた」は小・中学校よりも各地区子供会によって盛んに利用され、競技会熱も高くなってきているということである。このことは1992年に群馬県子ども会育成団体連絡協議会から出版された『創立30年誌ぐんまの子ども会』<sup>6)</sup>のなかで、「上毛かるた大会」を主な活動の1つとしている子供会が、資料を寄せた全68市町村子供会のうち54件に達すること（そのうち14件は「上毛かるた大会」の写真に掲載するほど盛況）からも明らかである。また、県内の各地区子供会に入会している児童・生徒の総数がおおよそ20万人に達していることから、群馬県の多くの児童・生徒が「上毛かるた」で遊び育ってきているといえよう。こうした背景には、戦後の荒廃時に社会教育の立場から生まれた「上毛かるた」が、一時学校教育の力を借りて発展し、その後、地域の社会教育活動の再興・再活性化されたのを機に、本来の担い手に戻っていったということが考えられる。

## ②その他の活動

県全体の子ども会あげてのかるた大会の他にも、群馬県において「上毛かるた」は実に様々な場面で用いられている。たとえば県民向けの新聞紙面や雑誌、放送などでは、かるたに読まれている事象を取り上げる場合、たいていその読み札とともに紹介される程である。活動としても、各単位子ども会主催の「上毛かるた廻り」<sup>7)</sup>や、個人製作の英訳版「上毛かるた」を用いたかるた大会などが行われている。また、1994(平成6)年の県民人口200万人達成記念で、「上毛かるた」を用いた群馬県統計書『統計で見る上毛かるた』<sup>8)</sup>が発行されたり、県主催の記念行事として「みんなでアタック！走る上毛かるた大会」が行われた（約1000名の親子が参加）。

学校教育の面でも「上毛かるた」の導入は盛んで、1994(平成6)年に筆者が行ったアンケート調査<sup>9)</sup>によると、対象とした県内の小・中学校105校のうち、「上毛かるた」を導入している学校

は32校にもほびっている。活用の種類としては、特別活動としてのかるた大会が25件と最も多く、次いで各教科が13件となっている。教科のなかでは社会科が9件と多くを占め、主として小学校4年生社会科の(大)単元「私たちの群馬県」で、群馬県の地形や産業の学習をする際に活用さ

第2表 4年「つるまう形の群馬県」の単元計画  
(平成5年度太田市立九合小学校年間指導計画社会より)

大単元名=「つるまう形の群馬県」 配当時間(11時間)

- 目 標
1. 群馬県の土地や産業の様子を調べることを通して、地域の様子に関心を持つことができる。
  2. 群馬県全体の地形や主な産業、都市や交通網などの関連、他地域との関連について考えることができる。
  3. 群馬県全体の地形や主な産業、都市交通網などを資料を効果的に活用し、地図などにまとめることができる。
  4. 群馬県の地形や産業の特色を理解するとともに、県内の人々の生活は地域との関わりがあることを理解することができる。

評価の観点・評価方法

過程	ねらい	時間	主な活動(多様な学習活動)	留 意 点	培 いたい力	評価の観点評価方法				準備・資料
						関心度	思考判断	技能表現	知識理解	
課題をつかむ 計画を立てる	○群馬県の様子を紹介するには、どんなことを紹介すればいいかを考え、それを調べていくための学習計画を立てることができる。	1	○旅行などに行ったことのある県内の地域を発表し合い、白地図に印を付ける。 ○そこは、どんな様子だったか、どうやって行ったか、お土産は何かなどを発表し合う。 ・どこらへんかわからない。 ・山に閉まれて涼しかったよ。 ・関越(自動車道)に乗って行ったよ。 ・梨を買ってきたよ。 (群馬県のパンフレットを作るためには群馬県の様子を調べよう。) ○群馬県の様子を紹介するパンフレットを作るには、どんなことを調べればいいか話し合う。 ・主な市町村の名前 ・土地の様子(山、川、土地の高低) ・交通の様子(道路、鉄道網) ・産業の様子	○旅行などで行ったことがある場所など、子どもたちの経験を発表させるなどして関心を高める工夫をする。 ☆白地図に印を付けさせることで、子どもたちに未知な、不確実な事業に気付け、追求の意欲を高めるようにする。 ○課題は教師が提示し、その追求の方法を話し合わせ、学習の目的がつかめるようにする。 ◇3年社会科「なるほど、ザ、太田市」との関連。比較的捉えやすい太田市の様子と関連させ、それを発表させながら学習を進めていくようにする。	計画立案力	○発言				○群馬県の白地図 ・旅行のスナップ写真 ・旅行の土産 ・ワークシート
			○白地図を制作しながら、群馬県の土地の特徴について理解することができる。	2		○群馬県の衛星写真を見て、気付いたことを話し合う。 ・緑が多い ・山が多い ・白いところは何だろう。 ・山の間を川が流れている。 など ○等高線の意味について知る。 ○群馬県地図をもとに、県の土地の様子について白地図にまとめる。(制作活動) ・土地の高低 ・山 ・河川 ○群馬県の土地の特徴について話し合う。(相互交流)	☆群馬県の衛星写真を提示することで、土地の高さに着目させ、等高線を学習する動機づけを図る。 ○等高線の立体模型を提示するなどして、等高線の意味について捉えさせるようにする。 ☆○等高線に沿って白地図に色塗りをさせることで、群馬県の土地の特徴について具体的につかませる。	観察力 資料活用力 思考力	○発言	
確かめる	○自分が行ったことのある県内の地域や上毛かるたに書かれている地名を絵地図にまとめながら、群馬県の都市や交通網を調査することができる。	4	○自分が行ったことのある県内の地域や読み札に書かれている地名がどこにあるかグループごとに調べ、白地図にまとめる。(調査活動) ・群馬県の主な市町村名 ○グループごとにまとめた白地図をもとにクラス全体で模造紙4枚大の絵地図にまとめる。(制作活動) ○絵地図に示された目的地までの交通網を調べ、白地図にまとめる。(調査活動) ・鉄道 ・高速道路 ・国道、主な幹線道路 ○調べた結果を絵地図に記入していく。(制作活動) ○群馬県の交通の特徴について話し合う。(相互交流)	○上毛かるたに書かれてある地名を絵地図にまとめさせ、自分で訪れた場所を紹介し合せて、これからの学習の意欲づけを図る。 ☆○体験的な活動を多く取り入れ、またそれを通してクラス全体で作品を一つに仕上げていくことで、子どもたちの積極的な探求心を育てようとする。 ○目的地までの交通網を調べることで、調べることの目的を明らかにして、調べる意欲を高める工夫をする。 ○絵地図をB4版に縮小したものを白地図として与え、主な交通網だけを記入させるようにする。 ○鉄道や道路の延長上として県内や国内の色々な地域とのつながりも触れるようにする。 ○絵地図を制作する中で、八方位や縮尺の必要性を理解させるようにする。	資料活用力 表現力 資料活用力 表現力 思考力	○発言	○作品 ○作品	○作品 ○作品	○群馬県全国 ・群馬県市町村地図 ・上毛かるた ・群馬県白地図 ・模造紙大の群馬県白地図 ・地図帳	
			○群馬県の産業について調べ、その特徴を理解することができる。	2	○絵地図に示された地域の主な産業をグループで調べ、さらに副読本、地図帳などを使って他の産業についても調べる。(調査活動) ○調べた結果を絵地図に記入していく。(制作活動) ○群馬県の産業の特徴について話し合う。(相互交流)	○生産物を通して県内や国内の色々な地域、また外国とのつながりにも触れるとともに、子どもたちの身近な生活との関わりにも気付かせる。 ◇3年社会科「町で見つけたニット工場」との関連。 ○太田市の自動車産業と世界とのつながりを例にして、群馬県内の諸産業の外国との関わりについて考えさせる。	資料活用力 表現力 思考力	○発言	○作品 ○作品	○作品 ○発言

過程	ねらい	時間	主な活動（多様な学習活動）	留意点	培いたい力	評価の観点評価方法				準備・資料
						関心・意欲	思考判断	技能表現	知識理解	
まとめる	○群馬県の土地や産業の特徴についてパンフレット作りを通してまとめることができる。	2	○群馬県を紹介するパンフレットを作る（表現活動）	○今までの学習の成果を生かし、図を用いて表現させるようにする。 ☆展示会や発表会を開き、子どもたちの追求結果が相互に評価できるようにする。 ◇道徳・4-③郷土愛との関連	表現力			○作品	○作品	相互評価カード

評価基準

評価の観点	評価基準
社会的事象への関心・意欲・態度	意欲的に群馬県の土地や産業の様子を調べようとし、地域について関心を持つとする。
社会的な思考・判断	群馬県の地形の特徴を考え、主な産業の自然との関わりや、他地域との関連について考えることができる。
観察・資料活用技能・表現	地図などの資料を活用して、群馬県全体の地形や主な産業、都市や交通網などを調べ、白地図や、パンフレットにまとめることができる。
社会的事象についての知識・理解	群馬県の地形や産業などの特色を理解するとともに、県内の人々の生活は他地域との関わりがあることを理解することができる。

れている。太田市立九合小学校では、平成五年度年間指導計画（第2表）の中に「上毛かるた」<sup>10)</sup>を明確に位置付けている。このように、群馬県において「上毛かるた」は各方面から注目され、群馬県の教育・文化を彩る存在となっている。

なお、群馬県においては、1975（昭和50）年頃以降、市町村レベルや学校レベルの郷土かるたも多数作られており、1995年（平成7）年現在合計約50数種類を数えている。これらの郷土かるたの製作には、「上毛かるた」が少なからぬ影響を与えていると推測される。

### 3 「上毛かるた」の札の分析

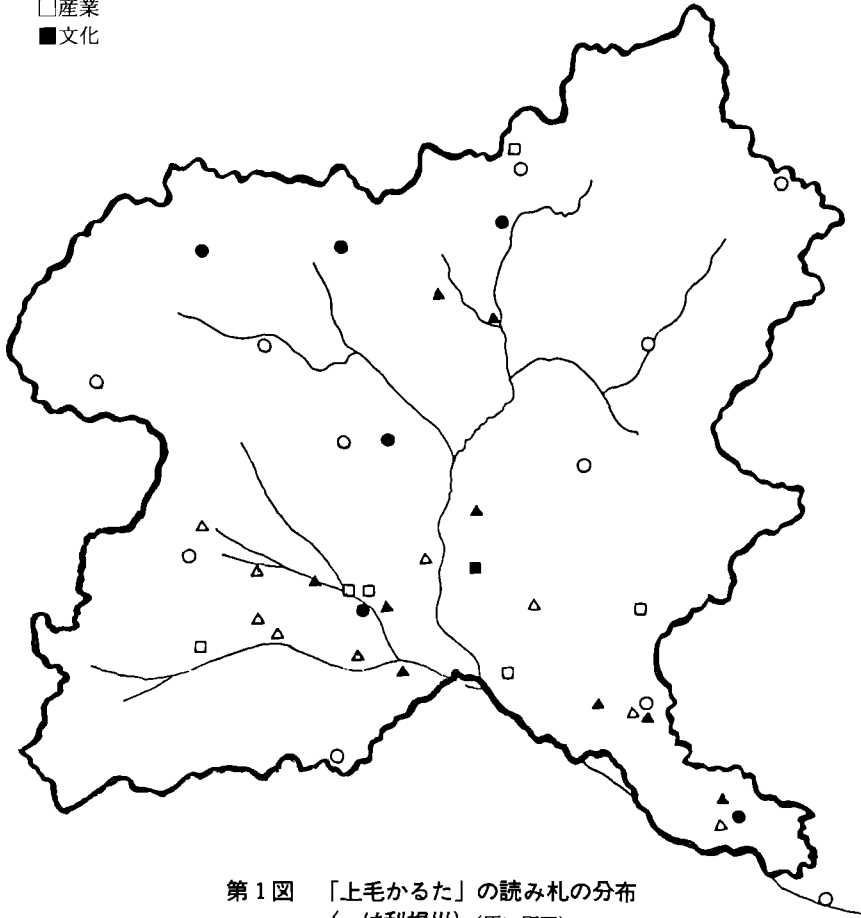
では次に、「上毛かるた」の内容に関して、読み札、絵札、解説文、「上毛かるたの遊び方」の4つの観点から分析し、それらをふまえて「上毛かるた」に込められているメッセージについてまとめていくことにする。

#### （1）読み札の分析

「上毛かるた」の読み札は、その一句の中に複数の題材を読んでいる場合が多い。ここでは読み札の文脈から判断して、一枚の読み札につき主要と思われる題材を原則として一つ取り上げることにする。そして、その題材を自然、温泉・観光、史跡、歴史的人物、産業・交通、文化に分類し（第3表）、それを群馬県地図の上に示す（第1図）。

第1図をみると、読まれた題材は多岐にわたり、また県内全域に分布していることが明らかである。これは「上毛かるた」が製作の主旨通り、県民全体での活用を期待されていたことのあらわれといえよう。「つる舞う形の群馬県」内の小さな川が合流して、ツルの動脈のような利根川を形成し、利根川やその支流に沿ってほとんどの題材が分布している様子は、川（水）の側に人間が住みつき、そこから文化が生まれていったことを再確認させるものである。また、その歴史的な題材は特に県中西部に多く、自然名勝的な題材は県北部に多く分布していることも瞭然としている。これらから「上毛かるた」の読み札には、群馬県各地の代表的な事象が極めて厳選されて読

- 注) ○自然  
 ●温泉・観光  
 △史跡  
 ▲歴史的人物  
 □産業  
 ■文化



第1図 「上毛かるた」の読み札の分布  
 (～は利根川) (原口原図)

み込まれていると言える。

「上毛かるた」の読み札についてその特徴を調べてみよう。まずはその句調であるが、これは「いろはかるた」の伝統を受け継いだ七五調形式をとっている。「いろはかるた」を意識している様子は、購入したばかりの「上毛かるた」の札が「いろは、の順に並べられていることから明らかである。また、すべての読み札の漢字に読み仮名が付されていることは、漢字を読むのに比較的困難な幼い子どもたちでも遊べるように配慮した結果と思われる。

さて、七五調の七五を合わせた十二音という数は、一説に日本人の一呼吸間の平均読誦音といわれて<sup>11)</sup>、人々がそれぞれの読み札を読むときには、四拍子のリズムを感じながら、適当に休止符を入れて、長・短と唱えることだろう（例えば「つる舞う形の群馬県」ならば、「つる舞う形の」、 「群馬県」のように）。この呼吸によく馴染む七五調の文句を、頭に入れながら、何度も遊ん

第3表 「上毛かるた」の読み札の分類

分類	事 象 名	分類	事 象 名
自 然	利根川	歴 史 的 人 物	船津伝次平
	吹割の滝		田山花袋
	榛名山		新島 襄
	吾妻溪谷		塩原太助
	鬼押出し (浅間山)		関 孝和
	三波石		新田義貞
	妙義山		呑龍上人
	尾瀬沼		内村鑑三
	赤城山		杉木茂左衛門
	谷川岳		
温 泉 ・ 観 光	金山	産 業 ・ 交 通	交通要地高崎市
	雷と空風		水力発電
	伊香保温泉		伊勢崎銘仙
	四万温泉		機業地桐生市
史 跡	草津温泉	文 化 そ の 他	まゆ・生糸の生産
	水上温泉		下仁田ねぎ・こんにゃく
	花山公園		清水トンネル
	白衣観音		県庁所在地前橋市
	富岡製糸場		200万人人口
	中仙道 (安中杉並木)		八木節音頭
	多胡碑		義理人情にあつい性格
	碓氷の関所		群馬県の形 (つる)
茂林寺			
貫前神社			
二子山古墳			
金山城			

注) 但し「太田金山子育て呑龍」と「雷と空風義理人情」「水上、谷川スキーと登山」の読み札については複数の事象を取り上げている。

でいるうちに、多くの群馬県民は、知らず知らずのうちにその読み札を脳裏に留めていくようになり、その結果、群馬県内随所で「上毛かるた」の読み札が「郷土の言葉」的な記号・暗号として、しばしば用いられるという“奇異、な現象を生み出していったと考えられる。

この七五調の読み札は、短歌より少ない“十二音、という字数で、ある事柄を適格に表現しなければならないことから、読み札を作成する際は、言葉に対する鋭さやきびしさが要求される。

「上毛かるた」の場合、国体的な思想・心情に敏感だったGHQの検閲があっただけに、その読み札には心情的な用語（特に形容詞）が極力排除され、エッセンスだけが簡潔明快に読み込まれており、それがかえって、“さっぱりしている性格、と評されることのある上州人の気質に適ったもの<sup>12)</sup>になったと思われる。

「上毛かるた」の読み札の中で、時代の変化とともに書き改められてきた札が一種ある。それ



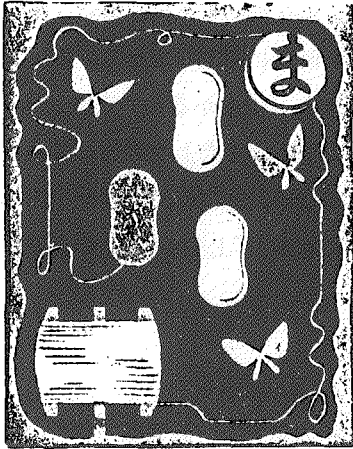
は、県民人口を読んだ「ち」の札「力あわせる200万」で、製作当初の人口部分は160万だったが、後の県民人口の増加に伴ない、10万人ごとに修正され、各時代に対応してきている。これは他種の郷土かるたにはみられない「上毛かるた」の特色の一つで、「上毛かるた」で遊んだ世代ごとに時代の遷移が味わえる粋な計らいと評価できるが、今日「上毛かるた」を発行している群馬文化協会によると、この修正は製作当初予定していたものではなく、まったくの偶然の産物だったという。しかし、このような柔軟対応をしてきた読み札の存在が、「上毛かるた」の発展に少なからず寄与したのではないかと推測できる。

## (2) 絵札の分析

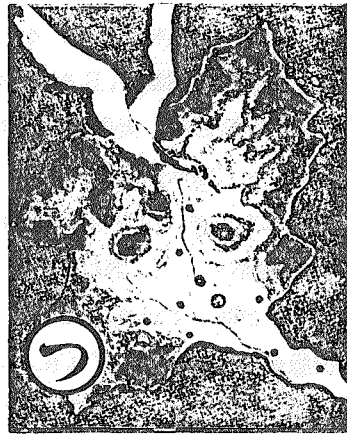
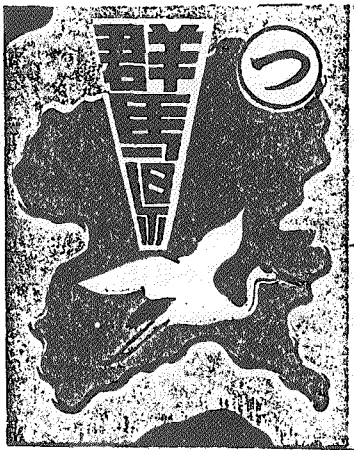
さて、かるたというのは、読み札と絵札が相関して、その効果を一層発揮するものであろう。絵札も読み札と同様、何度も何度もかるた遊びをしているうちに、その情景が印象深く脳裏に焼き付けられていくものと思われる。

絵札は一つの情景で読み札（題材）を十分に表現しなければならない。だから、作成する際にはある事象に対する鋭い洞察力、見る者の想像力をかきたてるような豊かな筆力等が要求される。絵札を担当した小見辰彦は、実用美術の研究に長く従事していた画家で、伯父の丸山清康（解説文の執筆担当者）から絵札作成を依頼された後、夏期休暇一杯で構想をまとめ、描きあげたというが、この絵札はその後、小見自身の筆により当初の趣をなるべく崩さないよう描き直され、1968（昭和43）年新版となって発行された。絵札の新調理由について小見は、“実物大の原画を別の用紙に引き写す当時の手がき製版にかわって新しく写真製版が可能になったため、と語っている。新版は旧版の絵札に比べ、どれもより実体に近付いた写実的なもので、絵画的な美しさが増している。しかしその一方、旧版の絵札もアイデアたっぷり興味を引かれる札が少なくない。例えば、旧版の「繭と生糸は日本一」（第2図）は、繭から糸が出てそれが札の端をぐるりと巡り、糸まきに巻きついていく様子を描いており、繭から糸ができるまでのプロセスを見る者に想像させる。

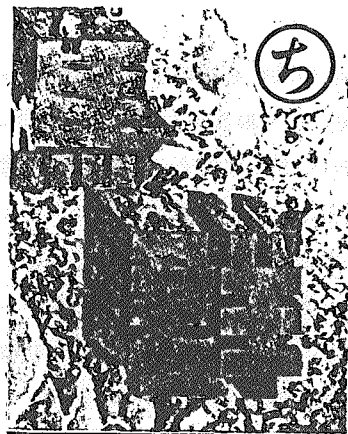
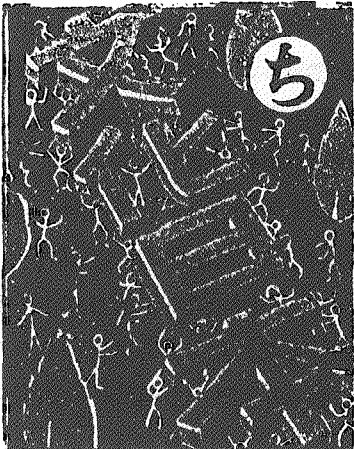
旧版と新版の絵札を比較すると、時代の移り変わりを物語るような札があって興味深い。例えば、「つる舞う形の群馬県」（第3図）を見比べると、旧版の「群馬県」の大文字が新版では消え、市を表す符号が9つに増え、県庁所在地前橋市辺りに日の丸の絵が描かれている。この変化の意味するところは、あくまでも私見にすぎないが、次のように考えられる。“製作時（旧版）では群馬県そのものの復興が主眼とされていたことから、県という意識を県民に強く持たせるためにも、「群馬県」と大きくアピールする必要があった。それから時代が過ぎ、群馬県は市の増加をみるまでに発展し、製作時に主眼としていた戦後復興は一通り達成したような状態になった。その一方、終戦直後日本は連合国の一時支配下だったが、既に独立が認められ国際的な復帰を果たしている。これらをふまえ、今後の群馬県としての方向は、民主国家日本を形成するもとなる民主的な自治体として立脚・発展していくことであり、このような願いを新版の絵札に込めた”。



第2図 「上毛かるた」の「ま」の絵札  
(旧版：左、新版：右)



第3図 「上毛かるた」の「つ」の絵札  
(旧版：左、新版：右)



第4図 「上毛かるた」の「ち」の絵札  
(旧版：左、新版：右)

また、「力あわせる200万(当初は160万)」(第4図)を見比べると、旧版の絵では県民が「文化日本」という文字を支えているが、新版の絵ではその文字が「群馬」と変化している。旧版の「文化日本」は、戦禍にまかれた当時の日本を、文化によって再建していこうとする潮流を意識させようとしたと考えられ、同時に「上毛かるた」がそれを具現化したものの一つであるとアピールすることにもつながったと思われる。そして、「文化日本」が「群馬」に変わったのは、先に見たように新版の「つ」の絵札において消去された「群馬県」という文字を、新版の「ち」の絵札に代替して、記したためではないかと考えられる。その他、絵札の新旧比較で時の流れが認められるものの例としては、「昔を語る多胡の古碑」があり、旧版では外から見えた古碑が新版では外壁にしっかりと覆われて見えなくなっている。

この小見の原画(新版)は、編纂委員会の中心人物浦野匡彦によって、彼が没するまで家族の目にすら触れることなく奥深くしまわれていたという。浦野らにとってどれだけ「上毛かるた」が大切なものだったか、彼は亡くなる直前に、介護をしていた家族に対し次のように言い遺している。「戦後いろいろな仕事をしてきたが、故郷群馬に残せたたった一つの遺産は「上毛かるた」だ。その原画は何よりも大切な俺の宝だ。(浦野氏長女、西片恭子氏談)。

現在、「上毛かるた」の原画は群馬県立歴史博物館に保管されている。同館では、県民人口200万人到達記念として、1994(平成6)年10月1日から11月27日にかけて、「近代群馬のあゆみ」展を開催したが、その企画展の「21世紀に向かって」という一角で、「上毛かるた」の原画を一般公開した。

### (3) 解説文の分析

「上毛かるた」の読み札の裏には、当時歴史学者としてまた教育者として著名だった丸山清康によって解説文が付されている。これは、編纂委員会によって「上毛かるた」の最も特徴的な要素と評価されている。解説文は読み札・絵札の内容を補充する存在であり、日本地理・日本歴史の教育が停止されていた製作当時、子どもたちの知的成長を援助する意味でも大きな期待がかけられていたと考えられる。

この解説文の記述は、県や都市の人口数の変化をはじめ、それぞれの時代の実情や潮流にあうように随時改められてきている。例えば、1957(昭和32)年版の「は」(花山公園つつじの名所)で記されていた「南にうめ林がある」は1994(平成6)年版では削除されている。また、1958(昭和33)年版「な」(中山道しのお安中杉並木)では、「碓氷郡安中町を通る旧中山道の両がわに1軒にわたって見事なすぎ並木がある(略)樹数300余、が、1995(平成6)年版では「安中市を通る旧中山道の両がわに1軒にわたって見事なすぎ並木があった。(略)現存樹数46本余」となっている。これらの解説文の相違については第4表に記す通りである。各解説文を比較することによって、新旧の絵札を比較する以上に時代の変化を読み取ることができるだろう。

第 4 表 解説文の変遷 (1957年度版・1994年度版)

札	1957年度版	1994年度版
は	1 (指定名勝県立公園) 2 南にうめ林がある 3 春は2千株のつつじの老樹が花に飾られる 美事さに、行楽の客に、にぎわう。	1 (指定名勝県立つつじが丘公園) 2 × 3 春は樹令300年以上の2千株のつつじの老 樹と樹令100年未満の3千株のつつじが開花 する美事さに、行楽の客でにぎわう。
ほ	1 自然主義文学を唱えて文学界に新気運を作 り、その発達に貢献した。	1 自然主義文学を唱えて文学界に貢献した。
ち	1 人口 男 781,633 女 831,916 計 1,613,549 世帯数 301,481 一平方軒当り人口 255人 2 主要農産物 米 1,172,800石 大麦 624,000石 小麦 847,900石 さつまいも 33,920,614貫 (30年) じゃがいも 12,782,255貫	1 人口の推移 昭和33年 1,608,000人 48年 1,718,000人 53年 1,814,000人 59年 1,903,000人 平成5年 1,996,000人 2 ×
り	1 主な発電所 (最大出力) 佐久(利根川) 72千kW 岩本(〃) 27〃 原町(吾妻川) 25 松谷(〃) 23 箱島(〃) 23	1 (主な発電所) (最大出力) 玉原 1,200,000kW 矢木沢(利根川) 240,000kW 佐久(〃) 73,000kW 須田貝(〃) 46,000kW 上牧(〃) 30,000kW 岩本(〃) 28,000kW 白根(片品川) 10,300kW 原町(吾妻川) 26,500kW 松谷(〃) 23,500kW 箱島(〃) 23,100kW 藤原(利根川) 21,600kW 県営発電所20ヶ所 199,510kW 総発電量 2,173,840kW
る	1 主トンネルの南北からループトンネルで登 る珍しい形式である。 延長 9,702M 順位 日本第1位、世界第9位 開通 昭和9年1月	1 新清水トンネル(昭和42年9月開通)は延 長13,500mで、日本第2位、世界第7位の長 さで名高い。又、上り列車が通る清水トン ネル(延長9,702m、昭和9年1月開通)の次の 湯檜曾トンネルはループ式になっていて珍し い形式である。
か	1 人口 125,269人 (31年)	1 高崎市人口 238,023人 (平成5年7月1日現在)
た	1 所在 利根郡東村追貝	1 所在 利根郡利根村追貝

札	1957年度版	1994年度版
つ	1 位置 東経139° 北緯36°23' 面積 6,335.91万平方 東西 96軒 南北119軒 2 10市	1 位置 東経139° 3' 51 北緯36°23'17 面積 6,335.61平方軒 東西 95.90軒 南北 119.14軒 2 11市
な	1 (指定天然記念物) 2 碓氷郡安中町を通る旧中山道の両がわに、 1軒にわたって見事なすぎ並木がある。 3 樹数 300余	1 × 2 安中市を通る旧中山道の両がわに、1軒に わたって見事なすぎ並木があった。 3 現存樹数 46本余
む	1 多野郡にはこのほかに山上碑	1 附近にはこのほかに山上碑
お	1 太田市人口 50,164人 (31年)	1 太田市人口 143,090人 (平成5年7月1日現在)
や	1 所在 吾妻町、長野原町	1 所在 吾妻郡吾妻町、長野原町
ま	1 × 2 養蚕戸数 80,251戸 収繭量 4,884,750貫 (30年) 生糸生産 597,208貫	1 福島県と共に日本の主要生産県である。 2 養蚕戸数 12,070戸 収繭量 6,212.9 t 生糸生産 800,709kg 器械製糸 703,379kg ぎぐり 77,398kg 玉糸 19,932kg (平成3年度出来高)
け	1 政治・文化経済 2 人口 171,782人 (昭和31年)	1 政治・文化・経済 2 前橋市人口 287,765人 (平成5年7月1日現在)
ふ	1 床しい寺	1 ゆかしい寺
て	1 今もなお参る人が	1 今もなお参詣人が
あ	1 交通 草軽電鉄北軽井沢	1 交通 軽井沢から草軽交通バス 中軽井沢から西武バス
き	1 人口 117,172人 (31年)	1 桐生市人口 123,381人 (平成5年7月1日現在)
め	1 人口 85,676人 (31年)	1 伊勢崎市人口 119,057人 (平成5年7月1日現在)
し	1 勢多郡荒砥村の二子山	1 旧勢多郡荒砥村の二子山

注) 各札の番号は解説文の内容を整理したもので、各札同じ番号は類似の内容を示す。

×印は類似内容の記述がないことを示す。

#### (4) 「上毛かるたの遊び方」の分析

編纂委員会では、遊び方（競技ルール）を決定する際にも、白熱した議論を展開したという。その争点となったのは、価値観の混沌としている戦争直後、「上毛かるた」で遊ぶ子どもたちに対して、その製作の精神ともいえる「郷土復興」、「民主主義」等をより確かに伝えるためには、遊び方そのものにも配慮が必要で、どんな工夫を施すべきかということではなかっただろうか。

「上毛かるたの遊び方」（第5表）をみると、まず「(一) 競技の心掛け」にキーワードを込めた表現、すなわち「かるた遊びを楽しみながら、郷土に関する知識を深化、郷土に対する愛情を高揚、礼儀正しきや規範性を育成する、等が明示されている。また、競技方法に個人戦だけでなく三名一組の団体戦も用意されていることから、子どもに協力性を意識させるという配慮も窺える。実際の競技進行に関して、競技の始めと終わりに「礼」を交わすこと、競技中の札の移動は相手の了解を得ること、相手に不満がある場合は審判を通じて堂々と意見を述べること等が明示されている。これらの遊び方（競技ルール）を概観しても、「上毛かるた」遊びと「郷土復興」「民主主義」との関連が想起されることだろう。

また、「上毛かるたの遊び方」では、やく札についても規定している。普通獲得した枚は一枚一点で採点するが、やく札を揃えているとボーナス得点として加算できたり、勝敗決定の際優位になったりして、場合によっては逆転も夢でなくなる。「上毛かるた」のやく札は、県の形「つ」、県民人口「ち」、県庁所在地前橋市「け」と、太田・高崎・伊勢崎・桐生市などの市「お」「か」「め」「き」、赤城山・妙義山・榛名山などの山「す」「も」「の」を表した10枚がその対象となっている。やく札の獲得は競技者にとって当然高い関心ごととなるから、44枚の札のうちその10枚に対してはとりわけ強い意識を持つことになるだろう。この観点から察すると、編纂委員会はこれらの10枚の札に特別重要な意味合いを持たせたと考えられ、このことは、あるべき郷土（群馬県）認識の中身を編纂委員会なりに示したのとも考えられる。

なお、「上毛かるた」の遊び方（競技ルール）がこまごまと規定されている別の理由には、県大会や県内各地域、各レベルで活用される時に、遊び方（競技ルール）をめぐって起こりうるトラブルをできるだけ回避、もしくは迅速に対応するためということが考えられる。

#### (5) 「上毛かるた」のメッセージ

戦争直後というきびしい時運が生んだ「上毛かるた」には、製作の精神といえる「郷土復興」、「民主主義」、そして「子どもたちのための遊び」等が、その構想から製作の過程を含め、読み札、「絵札」、「解説文」、「上毛かるたの遊び方」の中に織り込まれているといってよいだろう。例えば先に見た「力あわせる160万」という読み札、それに対応した「文化日本」という文字を支える人々を表現した絵札（旧版）は、大人も子どもも一人一人の力を発揮して、文化的に郷土を復興していこうというメッセージ性を伝える。現在の1994（平成6年版）では、この読み札は「力あわせる200万」に修正され、これと1968（昭和43）年に新調された絵札の県民が「群馬」という文

第5表 「上毛かるた」の遊び方

上毛かるたの遊び方

(一) 競技の心掛け

この「かるた」は、私達が楽しく遊ぶから、私達の郷土である群馬県の歴史上有名な人物や、重要な産物、代表的な都市や、山と川、風景等を正しく理解し、知らず知らずのうちに、郷土への知識を深め、郷土への愛情を高めて行きたいと考えて、作つたものです。だからこの「かるた」で遊ぶ時は、勝敗にはかりこたわらずに、礼儀正しく人々々と競技をして、お互いの品性を高めるように、楽しく遊びましょう。

(二) 競技のやり方

この「かるた」の競技は、毎年行われる「上毛かるた県大会」でも、群馬の「予選大会」でも、次のように行われています。

- (一) 家庭でおやりになる場合には、この他にもいろいろやり方を考へて、お遊び下さい。
- (二) 団体競技は、三人が一組となり、二組で勝負します。
- (三) 個人競技は、一人対一人で勝負をします。

(三) 競技に必要な係員

- 1. 進行係 一、二名 (競技をすすめて行くのですが、人がかたわることができません。)
- 2. 読み手 一、二名 (読札をよむ)
- 3. 審判員 各試合に一、二名 (競技を公平に審判する)

(四) 競技に用いる札

取札、読札とも四十四枚です。

(五) 競技の準備

- 1. 先ず三人ずつ向い合つて一列に立ち並び、この陣の巾は一、五メートル以内とし、この陣の中に三人が適当な間をおき、両陣を揃えて(おお)居座は上げて(よい)お坐ります。個人競技の札の巾は、〇五メートル以内とし、二人は八枚ずつとなります。
- 2. 進行係の合図で、真中にいる者が代表となつてジャンケンをし、勝つた者が札をよく切つて、二十二枚ずつに分けて、前に

た者が札をよく切つて、二十二枚ずつに分けて、前に

- 3. 札のならべ方 札は自陣の前に、団体の場合は二段、個人の場合は、三段にそれぞれ平均にならべます。両方の陣の間は三センチ(最の目三つ)はなし、各段の間及び左右の間は一センチほど(きり)はなし、各段がしらの間は、二十センチ以上あけます。札の並べ方にいろいろ工夫を加えても、かまいません。札の並べ方、団体競技の札は三人で平均に受け持つこと。(二人は八枚ずつとなる)
- 4. 記憶時間 「かるた」をならべ始めてから五分間を記憶時間とします。この間に取札を記憶します。

(六) 競技開始

- 1. 記憶時間が終ると競技に入ります。

- 2. 先ず「読み手」が「空札」を二回読みます。空札には一つ一つの形を「群馬県」の札を用います。二回目に読む一つ一つの形を「群馬県」の札を用います。三回目に読む札から取りはじめます。その後は、今取つた札を字令として、今一度くり返して読み、最後までその形で続けます。
- 3. 競技中は勝手に札の位置を変えてはいけません。札の空いた所をかき、札の位置を変えたい時には相手の了解が必要で、どちらの札が残り一枚でも、横に三十センチ離して置く。各組の代表一名ずつで、この札を争い、一枚をとった者が残りの一枚も取ります。

(七) 採点

場得点の計算は、一枚一点とします。但し、団体競技の場合は、次のような「やく札」があります。

- 田中學校 ×田小学校
- 親札 ×ちけの三枚で十
- 五五五札 おかめきけの五枚で二十
- 三山札 すももの三枚で十

個人競技には「やく札」はありませんが、団体・個人とも同点の場合は、「つ」の札のある方を勝とします。

(八) 競技上の注意

- 1. 札を取るときは、押しても、はじいても、押しても引いても、はじいてもよいです。(札に指がはかみかかるとは、押してもよいです。)
- 2. 両手を使つたり札の上にかかるとは、押してもよいです。使わない方の手は膝から前に出さないし、使う手も札が読まれるまでは、膝の上に出さないし、膝がしらより前に出さないようにします。
- 3. お手つき 自分陣でも、相手の陣でも、読まれた札のない方をついたら「お手つき」として、取つた札の中から一枚を相手にやりませぬ。味方の三人がそれぞれ同時に「お手つき」しても、相手に読まれた札は一枚としてよいです。
- 4. あいこ 両方の手が重なつたら、下の手の者が取ります。同時に持札の者にゆずります。但し、その札の「やく札」の時には「審判あつかり」として、審判の始めと終りには、お互いに「札」をかわし、読みませぬ。
- 5. 競技の始めと終りには、お互いに「札」をかわし、読みませぬ。
- 6. 相手に不満があつても、直接「言い争い」をしないで、審判を通して言々と意見を述べませぬ。

郷土の歴史と地理をよみくた  
美しい たのしい かるた

解説付

**上毛かるた**

前橋市大手町三丁目十三番五号

原色刷り額 500円

群馬県婦人会館内

発売元 財団法人群馬文化協会

前橋市本町二丁目三番四号

取次店 株式会社 平

TEL(上毛)四二二二(代)

高崎市五福町五丁目五番地

取次店 株式会社 ネモト

TEL(上毛)五二二四(代)

字を支えている様子と見比べると、前述したような時代の移り変わりを読み取ることができる。また、「天下の義人茂左衛門」は、天和年間、当時の沼田領主真田伊賀守の悪政から農民の自由を取り戻すため、その命と引き替えに將軍徳川綱吉に直訴嘆願した杉木茂左衛門が読まれている。彼の熱く実直な生き方とともに、1947（昭和22）年の農地改革に象徴される日本農村の民主化に面し、改めて農民、農民運動を再考しようというメッセージが託されていると思われる。その他の多くの札をみても、未来への期待を沸かせ、苦境を乗り越えて前進していこうと県民の心に強く呼び掛けるようなメッセージを感じ取れるのではないだろうか。

さて、「上毛かるた」の読み札をみると、「日本」という文字が入った札をいくつか発見できる。「伊香保温泉日本の名湯」、「日本で最初の富岡製糸」、「繭と生糸は日本一」、「桐生は日本の機どころ」の四種であるが、これは、群馬県の特異性や重要性を国レベルの広い視野に立って見つめることにより、郷土群馬を復興していく気運を一層高めていこうとした意図があったのではないだろうか。読み札には明示されていないが、裏の解説文で日本一と紹介されている事象もいくつかある。

「日本」という文字に対し「群馬」という文字の入った札は、「理想の電化に電源群馬」と「つる舞う形の群馬県」の二枚である。その他の札には「日本」「群馬」の文字をみることはなく、群馬県各地域の事象を読んでいるだけだが、ここで指摘できることは「上毛かるた」の中に存在している「日本」「群馬」「県内諸地域」という空間が、「上毛かるた」の重要なメッセージとして隠されていたことである。このメッセージを読み解く鍵は、編纂委員会の中心人物である浦野匡彦の言葉に現われているのではないだろうか。以下に紹介しよう。…「先ず日本を知り、そして東洋を知り、更に世界を知り国際的視野にたつて物事を判断できるような活学の徒となれ。…略…私達は家庭に出発し、地域社会、そして県、国、世界と運命を共にすることとなっているのである。同時に親、師、社会、国家に感謝せねばならぬことが多いのである。平和で豊かであるがゆえに、現代社会の日本人はこの点を忘れがちであるが、忘れてはならぬことである。<sup>13)</sup>…

私たちは成長とともに、「家庭」「地域」「群馬」「日本」そして「世界」といった幾層もの空間に包まれて生活していることを知っていく。しかしその反面、それぞれの空間には自分と同じ人間が多様に存在していることや、それぞれの空間が密接に関連しあって成り立っていること、全ての空間の現実が私たち一人一人の意志とそれに基づく行動によって生まれたものであること等を認識する力は弱い。未来を決める選択肢は、実は私たちが直接意志を問われる身近な生活空間にたくさんある。身近な生活空間で自由に行動し、意志を反映させていくためには、その空間の様相を知ること大切であるが、それには広い視野を持つこと、それぞれの空間やそこに住む人々と自分との関わりを考えていくことが欠かせない。「上毛かるた」にはこのようなメッセージが込められているのではないだろうか。

戦後の惨状の中、荒れ果てた郷土を一丸となって守るため、また子どもたちに健やかで未来を描ける遊びを与えるために考案された「上毛かるた」は、当時の大人たちから子どもたちに贈ら



れた英知と愛の象徴だったともいえる。製作から50年経ち、戦争観、郷土観、教育観等様々な現実認識が揺らいでいる今日、「上毛かるた」の原点が改めて問いかける問題は大きい。

#### 4 おわりに

本稿では、社会科郷土学習における「郷土かるた」の活用の可能性を視野にいれながら、群馬県の「上毛かるた」を事例に、その読み札や絵札、解説文等について特徴を分析し、それらを「上毛かるた」に込められたメッセージとして考察してきた。以上をもとに、札の分析という観点から社会科教育における「上毛かるた」の意義について指摘できることは、第1に「上毛かるた」は郷土（地域）の在り方や方向性を考えていく上での基礎として有効なこと、第2に、「上毛かるた」は郷土（地域）の変容をとらえて学習を展開する際の資料として活用可能なことである。

#### 注及び参考文献

- 1) 原口美貴子・山口幸男(1995)：「郷土かるたの全国的動向—その社会科教育論的考察—」、『群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』第44巻, pp.225-254。  
山口幸男・原口美貴子(1995)：『郷土かるたと郷土唱歌—その社会科教育論的考察—』, 近代文芸社, 全217p。
- 2) 山口幸男監修・原口美貴子著(1996)：『上毛かるた, その日本一の秘密』, 上毛新聞社, 全258p。
- 3) 原口美貴子・山口幸男(1993)：「群馬県の歴史的人物と上毛かるた—大学生・中学生に対する調査」、『群馬大学社会科教育論集』第2号, pp.139-149。  
原口美貴子(1994)：「群馬県の史跡知識と上毛かるた—小・中学生に対する調査—」、『群馬大学社会科教育論集』第3号, pp.33-39。  
原口美貴子(1994)：「群馬県児童・生徒の郷土認識における上毛かるたの意義」(卒論要旨)、『群馬大学社会科教育論集』第3号, pp.51-55。  
原口美貴子・山口幸男(1994)：「郷土かるた遊びと郷土認識の形成—群馬県の上毛かるたの場合—」、『群馬大学教育実践研究』第11号, pp.1-44。  
山口幸男・原口美貴子(1994)：「郷土かるた遊びと児童・生徒の郷土認識への影響—群馬県の上毛かるたの場合—」, 社会系教科教育研究会編『社会系教科教育の理論と実践』, 清水書院, pp.291-302。
- 4) 本研究では、「地域」学習、「身近な地域」学習という用語ではなく、意図的に「郷土」学習という用語を用いている。その理由については下記文献を参照。  
山口幸男・原口美貴子(1995)：「社会科教育における地域と郷土」、『群馬大学社会科教育論集』第4号, pp.1～5。  
山口幸男・原口美貴子(1995)：『郷土かるたと郷土唱歌』近代文芸社, 全217p, 第3章。
- 5) 群馬文化協会(1987)：『上毛かるた40年の歩み』, 全51p。
- 6) 群馬県子ども会育成団体連絡協議会(1992)：『ぐんまの子ども—県子連30年の歩み—』, 全165p。
- 7) 現在群馬県で「上毛かるた廻り」を行っている子ども会としては、黒保根村子供会と白沢村平井出地区子供会がある。その詳細については前掲3) 原口美貴子・山口幸男(1994)「郷土かるた遊びと郷土認識の形成—群馬県の上毛かるたの場合—」を参照いただきたい。
- 8) 群馬県企画部統計情報課(1994)：『統計で見る上毛かるた』, 群馬県。
- 9) 原口美貴子(1995)：「学校教育における上毛かるたの活用—社会科教育からの考察—」、『群馬大学教育実践研究』第12号, pp.27-43。

- 10) 原口美貴子・鈴木徹(1995)：「郷土かるたを活用した社会科授業—太田市立九合小学校の事例—」、『群馬大学社会科教育論集』第4号，pp.61-76。
- 11) 大岡信・他(1992)：『定型の魔力』，河出書房新社，全225p。
- 12) 田崎篤郎編(1984)：『われら上州人』，上毛新聞社。
- 13) 浦野匡彦(1981)：『青少年へ贈る言葉わが人生論群馬編』，文教図書出版，pp.55-59。

(1995年9月13日受理)